
みちくさホームパーティー

高坂薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みちくさホームパーティー

【Nコード】

N1959D

【作者名】

高坂薫

【あらすじ】

遊佐家の姉弟たちは、今日もドタバタ騒がしい。しっかり者で姉弟たちのまとめ役である長女ツバキ、寡黙で聡明だけど腹黒で毒舌な次女カスミ、ちょっとおバカで姉弟たちからいじられがちな次男ダイキ、そして物語の主人公である、荒唐無稽、天上天下唯我独尊、長男コウタ。この四人を中心にして巻き起こる、ドタバタホームコメディです（多分）。

第一話 長男と長女とダイニングでの騒動（前書き）

力技的な強引な笑いと倫理的にどうかと思うような笑い（いわゆる不適切な表現）が多く含まれてますので、そういったものに抵抗がない方は、ぜひ。

このお話全体を通して見ると、グロイ表現は多分にありますが、状況としてはまったくグロイものではないのでたぶん大丈夫かと。

第一話 長男と長女とダイニングでの騒動

カーテンの切れ間からは木漏れ日のように細く日が差ししている。

その暖かな春の日差しにおれは少し目を細めると、テーブルの上に置いておいた、事務的な注意書きが幅を利かせている長方形の箱を手に取る。

マールボロと書かれたそれは、おれの一番好きなタバコの銘柄だ。そこからシガレットを一本取り出し、それを口にくわえると、おれはおもむろに火をつけた。

煙をゆっくりと肺に送り込む。

おれにとつてはこれ以上なく効果的な一服の清涼剤だ。途端に気分を落ち着けてくれる重厚な味わいが肺いっぱいに広がる。

「ぐほっ！ げほっ！ ぐほっ！」

むせた。

気を取り直して。

ゆらゆらと立ち上る紫煙が顔にまとわりつく。

口を薄く開くと、おれは肺に入れた煙をゆっくりと吐き出した。

うん、おれの一番好きな味だ。

当然ながらいつも通りのその味に気分をよくしたおれは、木製のサイドテーブルの上に置いてあるコンポでお氣に入りの音楽、オリコン初登場八十九位のく盗んだバイクで箱根八里をひとつ飛びを流し、これまたお氣に入りのミルクティーくアフタヌーンのティーを口に含んだ。

口の中に広がる上品な風味。舌を通り抜ける軽やかな味わい。ほどよい冷たさを保ったそれを、おれはゆっくり味わいながら喉

に流し込んだ。

「ぐはっ！ ごふっ！ げはっ！」

器官に入った。

気を取り直し……。

「うわっち！ ばか！ あっちい！」

タバコの火種が手に落ちた。

「いって！ あっつ、いったー！」

熱さのあまりテーブルにヒジをぶつけた。

「あっ、ちょ、ばか」

テーブルにヒジをぶつけた衝撃でミルクティーがこぼれた。

灰皿の中にあつたタバコとその灰が散らばるわ、こぼれたミルクティーでびしょびしょに濡れるわでちよつとしたブランニューシットになっているテーブルと、そのよく分からない液体の洗礼を浴びるフローリングの床。

うん。惨事だ。この事件をダイニング事変と名付けよう。

っーか、ヒジ痛っ。

「ちよつと、コウタ。何してんのさ、あんたは」

涙目で咳き込みながらヒジを押さえてうずくまっているおれを見

つけて、姉のツバキが駆け寄ってくる。今しがた帰ってきたばかりなのだろう、会社へ出勤するときのスーツイスタイルのままだ。

「まあ、なんつーか。ちょっとハードボイルドがマイブームで」
「情けないハードボイルドだねえ」

柔らかかそうな長い黒髪をかきあげながら、ツバキはバカにしたように深く息をついた。

「コウタ。今日は大学もバイトも休みだったんだっけ」

「休みじゃないけど、午前中だけだった。バイトは休み。ていうかツバキこそ、いつ帰ってきたの」

「ん。ついさっきだよ。ていうか、呼び捨てにするなって、いつも言ってるでしょ」

ツバキは後ろでまとめていた髪をほどきながら、唇を尖らせた。
「一応、姉としての威厳を保ちたいらしい。」

「器ちっさ」

「うるさいよ。まあ、呼ばれ方に関してはもうあきらめてるけどね」

「なるほど。男はあきらめが肝心っていうもんな」

「誰が男だよ。こんなにいる女つかまえて」

「いい女？ ボケるのは勝手だけど、おれ、ツッコミとか苦手だよ？」

「ボケてないよ？」

怒るというよりもむしろあきれた様子で、ツバキはため息をついた。

「でもびっくりしたよ。帰ってきたらあんたが咳き込みながら暴れ

てたから」

「咳き込んでたわけじゃない。つわりだ」

「妊娠してたの、あんた」

「あなたの子よ」

「え。パパあたし？」

「イエス、アイドゥー」

「そっか。じゃあベビー用品集めておかなくちゃ、ってこら」

よく言えば、緩急や変化球を織り交ぜた会話のキャッチボール。
悪く言えば珍妙な会話である。

ていうか、キレのないノリツツコミなんかする余裕があるなら「
イエス、アイドゥーはおかしいだろ」ってツツコめよ。

「まあ、いいか。コウタ、その辺ちゃんと片付けておきなよ」

「私はとてもイヤです。なぜなら、それはとても面倒だからです」

「なにそのちよっとしたニューホライズンみたいな断り方」

「なんで素直に英語の教科書って言えないんだ」

「なんで素直にごめんなさいって言えないの」

なぜおれがごめんなさいと言わなければならないのか、まったく
分からなかった。変な姉だ。

「あんたにだけは変とか言われたくないけどね」

黙りやがれ。

第一話 長男と長女とダイニングでの騒動（後書き）

一回目の連載にして、オチに関しても展開に関しても全力でブン投げた。

第二話 長男と次女とセンスの話

仕方なく、汚れたダイニングのテーブルと床を、濡れた布巾で拭く。

くそ。誰にも頭を下げたことのないことで有名なほど傍若無人でおなじみのおれが、どうしてこんな雑務を押し付けられなければならないんだ。

「誰かに頭を下げるくらいならマクドナルドで『スマイル下さい』って注文して思いっきり滑って周りの客の嘲笑を浴びた方がまだマシ……かなあ……うーん……マシなのかなあ……微妙だけど……やつぱそれはやだね。うん。冷静になって考えると、それはない」の格言でおなじみのこのおれが。

まあ、仕方ない。やるからにはてきばきとやって、さっさと終わらせてしまおう。

それに先駆けて、さっきの音楽——盗んだバイクで箱根八里をひとつ飛び——はゆったりと落ち着いた曲調だったので、ノリノリで掃除をするためにテンポの速い曲をかけることにしよう。

「うーん、どの曲がいいだろう。＜恋のハーレーで市中引きずり獄門の刑＞とか……＜キミとふたりで手をつないで、あれ？ これ手じゃねえじゃん！ え。なにこれ！ ぎゃー！＞とか……」

例えるなら、産みの苦しみのような苦悩と葛藤。

そんな表現がばつちりとはまるほど、おれの曲選びは難航した。十秒くらい難航した。その難航つぷりときたら、雑誌片手に鼻歌を歌いながら片手間で曲選びすることを余儀なくされたほどだ。

ここまで説明すれば、おれの苦悩ぶりも分かっていただけるとい

うものだろう。

そして十秒間さんざん考えた結果、たまたま手に取ったくサバの味噌煮・ズ>というアーティストのくわたしを地雷原につれてって、そしてわたしと一緒に死んで！>という曲をかけることにした。

ぶっちゃけ何でもよかったのだ。

そうしてノリノリというには語弊があるような平々凡々としたテンションで掃除をしていると、不意に背後から陰が差した。おれは半ば条件反射で後ろを振り返った。

「なに見てんだこの野郎」

「なにしてるの」

背後に立っていたのは妹のカスミだった。体中の力を抜いているということが雰囲気に分かるのに、背中に棒でも突き刺したようにしゅんと立っている。

人間から感情の起伏というものを抜いたらきつとこういう生物が生まれるんだろう、というほどの無表情で、おれが掃除する姿を眺めるカスミ。

「なんでダイニングがこんな状況になってるの」

「えーっとな。ツバキが右手で灰皿を振り回しながら左手でミルクティーを飲み、しかもテーブルの下をリンボーダンスで通過しようとしたらこうなった」

「そう。コウちゃん、あまり暴れて汚してばっかりいると姉さんに怒られるわ」

「物分かりいいな、おまえ」

「コウちゃんのウソが下手なだけ。ていうか、そんなウソつき通せると思ってたなら、私を侮辱しすぎ。一度死んで赤ちゃんからやり直さないのをオススメする。というか、もう率直に言うけど、死ね

よおまえ」

どうやらおれは輪廻転生の循環の中にいることすら許されないらしい。毒を吐く時だけやけに饒舌という物騒な特徴を持つ我が妹は、一度死んでみなくてもいいのだろうか。ゆとり教育の弊害だな。言いたいだけだけ。

「で。なんでそんな状況なの、そこ」

感情の波もなく、先ほどと同じことを尋ねてくるカスミ。ほんとに疑問に思ってたのか、こいつ。ちなみに、そこ、とはもちろん先ほどのダイニング事変の現場を指している。

「まあまあ、そんなことは些細な問題だきやらきにすえなつあばら、だよー。はっはー」

「コウちゃん。噛んだのに強引に話進めようとししないで」

「ていうか、おまえこそ何しにきたんだよ」

「別に。何か飲み物でも飲もうと思って」

おっ、上手い具合に話がすりかわった。話をはぐらかしたい時は噛めばいい。勉強になったね、これ。

「ところで、なに。この鬱になりそうな曲」

カスミは微かに顔をしかめながら、冷蔵庫を開けた。その中からミルクを取り出し、コップに注ぐ。

ちなみに、鬱になりそうな曲とはもちろんくわたしを地雷原につれてって。そしてわたしと一緒に死んで！>である。

曲はすでにB面に移っている。B面の曲は、ファンの間ではA面

よりも名曲であると評判のラブバードくずつと忘れないく灰皿で左のこめかみを殴ったら右の耳から脳漿が出たくだ。

「鬱になりそうとはなんだこの野郎！ 人がキツチンシンクの末に選んだ名曲を！」

かんなんしんく
「艱難辛苦、ね」

カスミの訂正の意味はよく分からないが、カスミはこの曲の良さを理解していないということだけは分かった。

というか、しょせん高一ていどの小娘には分かるまい。

この陰惨で猟奇的な歌詞なんて最高じゃないか。歌詞、知らねえけど。

「まあ、お前もあと三年経ったらこの曲の良さが分かるさ」

「年齢の問題じゃないわ。センスの問題。コウちゃんのセンスは、変」

ミルクを飲みながらも、まろやかさの欠片もない毒を吐く我が妹。うちの妹は言葉をオブラートに包むということを知らない。

ちなみに、そんなものはおれも知らない。

「ちなみに、どれくらい変？」

「ん。そうね。その度合いを野球で例えるなら」

おれとカスミの共通の趣味。それは、スポーツ観戦だった。

「盗塁をこころみる清原」

変だな。

「まったく三振しない清原」

変だ。

「内角の危険球を颯爽と避ける清原」

変すぎていつそ興味すら湧いてきた。

「真ん中に甘く入った球をレフトスタンドに豪快に突き刺す清原」

それは別に普通じゃね？ ていうかおまえ、清原のこと好きすぎじゃね？

「そんなことはどうでもいいの」例えにも飽きたのか、カスミは静かに話をブン投げた。

「で、これから掃除するんでしょ」

「おう。やんちゃな姉を持つと弟が苦勞するはめになるね」

「あくまで姉さんのせいにする気なのね」

「当たり前だろ。自分のせいだと認めたら責任を取らされる」

この受け答えがすでに、自分のせいだと認めてるようなものだけだ。

「そう。でも紅茶を飲んでむせたあげく、手に煙草の灰を落として、それにビックリした拍子に肘をテーブルにぶつけて、その結果テーブルに紅茶をこぼしたのはコウちゃんなんだから、仕方ないと思う」

全部見てたんなら、先言え。

第二話 長男と次女とセンスの話（後書き）

タバコでむせるところから見られてた。

第三話 長男と次男と遠山の金さん

掃除って疲れる。

といってもテーブルと床の表層的な汚れを布巾で拭き取っただけなので、実際には大した労働でもなかったのだろう。

だけど、興味のないことを無理やりやらされるってのは得てして疲れるものなんだ。主に精神的に。

おれは体にのしかかる疲労を隠そうともせず、むしろ「私こんなに疲れてますよー」というアピールすらしつつ、自分の部屋に戻るべく階段を上った。器ちっさ。

「疲れた……」

「コウ、コウ、コウ」

「もう寝ちまおうかな……夕方だけ」

「ねえねえコウ！ コウってば！」

「うーん、でも労働したら腹も減ったし」

「ねえってば！ 無視すんなよう！」

「よし、寝ながらにして晩飯を食おう！」

「そのカツコイイお兄さん」

「睡眠学習ならぬ睡眠食事だね。新しいー。斬新ー。おれすげー」

「すぐくてかつこよくて頭がよくてセクシーなお兄さん」

「兄貴をそんな必死に褒めちぎって、恥ずかしくないのかおまえは。気持ち悪い」

「気づいてんならさっさと返事しろよ！」

なぜそんなに疲れているのか知らないが、さきほどからおれの周

りをちよろちよると動き回っていた弟のダイキは、汗のせいで長めの前髪を額に張り付かせて、肩ではあはあと息をしている。

まあ、ダイキは元々体が小さいから、体全体で呼吸してもさして大きな動きには見えないけど。

「おまえこそ用事があるならさつさと言え。明日の朝日が見たいならな」

「なんでそんなに攻撃的なんだよう！」

若干後ろに退きながらもツツコミは忘れないダイキ。将来が楽しみな逸材だ。

「で、なによ。聞いてやるから言ってみな」

「う、うん」

ダイキは珍しく言いよんどんでいるようだ。

大きな目のくりくりとした両目の焦点を虚空に泳がせている。

なにか言いづらいことなのだろうか。

数瞬のためらいの後、ダイキは意を決したように口を開いた。

「お金貸して？」

「お金？ おまえ……中一にして金の無心か」

「むしん……ってなに」

「無心くんってあるだろ。金貸してくれる機械。アレみたいなもんだ」

「なるほど」

納得したような、さして興味もないような表情でダイキはうなずいた。

まあ、確かにおれの説明はざっくりしすぎてて分かりづらかった

とは思う。

「で、なんで金なんているんだよ」

「だって、今クラスでカードゲームが流行っててさあ、持ってないのれとユウジくんだけなんだもん」

「ユウジさんと親睦を深めればいいだろ。人には言えないくらいデ
イーブに」

「デイーブってなに？」

「おまえは知らなくていいことだ」

ダイキは顔にいっぱい疑問符を貼り付けている。が、教育上の
問題でそこは伏せておく。

「で。一応訊いてやる。いくら貸してほしいんだ」

「しょせんカードゲームだ。大した額にはならないだろう。」

「うん。五百円」

「このいやしいブタ野郎が！」

「うわっ！ びっくりした！」

目を丸くするとはこういうことなんだろう、というほどオーバー
リアクションで驚きを表してみせるダイキ。

「そんな大金やれるか！」

「ご、五百円って、そんなに大金なの？」

「あたりまえだバカ！ ドルに直したら約五ドルだぞ！ ユーロに
直したら……ええと……もういい！ 何でわざわざユーロに直さな
きゃいけないんだバカ！」

「なんでおれにキレルんだよう！」

「いいか！ 五ドルだぞ！ そんな大金あったら、バチカン市国く
らいならキャッシュで買えるわ！」

「バチカン市国って、五ドルで買えるの？」

「買えるね。同じ規模の小国が五国くらい買えるね」

「バチカン市国って、一ドルの価値しかないの？」

「そんなわけあるか！　ただバチカン市国をバカにしたら気が済むんだこの野郎！」

「キレるスイッチが分かんないよ、コウ……」

「謝れ！　バチカン市国の人たちはさておいても、おれに謝れ！」

そして慰謝料よこせ！　五百円！」

「やだよ！　なんでだよ！」

「その五百円でカードゲーム買うんだよ！」

「別にコウはそんなもんほしくないだろ！」

「ほしいわ！　めっちゃめっちゃほしいわ！　ちっちゃく千切って紙ぶきみたいにして遠山の金さんごっこすんだよ！」

「メーカーさんに怒られるよ！　せめて普通に遊べよ！」

「中一のくせにキレのあるツツコミしてんじゃねえよ！」

「ダメなの！」

「いや！　むしろすばらしいね！」

「じゃあよかった！」

「おめでとう！」

「ありがとう！」

「よし！　じゃあ話もまとまったところでおれ寝るわ！」

「うん！　おやすみ！」

ダイキの言葉を受けて、おれは部屋に入ってドアを閉めた。

激しい口論をした結果、ダイキはおれに金を借りに来ていたことを忘れてしまったらしい。バカは扱いやすくて助かる。

ちなみに、ダイキとじゃれあって夕食を食べるのを忘れていたところか、さきほど考案した睡眠食事の存在すらすっかり忘れていたということにおれが気付くのは、翌日の朝のことだった。おれってバカ。

第三話 長男と次男と遠山の金さん（後書き）

誰も起こしにこない寂しさ。

第四話 長男と長女と平日なのに日曜大工

「久しぶりのーふたりの休日ー、それなのにーきみはなぜかー、浮かない顔だねー。なぜならー実家がー燃えてーいーるーかーらー」

椅子に座り、テーブルに足を投げ出しながら、おれはいい気分で歌を歌っている。

今日、バイト帰りにCDショップに寄って、今週の話題の新譜を買ってきたのだ。

オリコン初登場五十九位のく死後硬直が始まっているきみと、なぜか刑務所に入っているぼく>>である。

「世界で一番ー強いボクサーにー、してやるとー言われたのにー、なんでぼくは今ー、ちからー、いっぱいー、酢飯をーかき混ーぜーてるーのー」

帰ってきてから、少なく見積もっても同じ曲を三十回はリピートしているので、歌詞もボーカルメロディもなんとなく覚えてきた。だからおれはCDから流れるボーカルの歌声に合わせて歌っている。

ヘッドフォンで聴いているので自分の声がよく聞こえないが、実にいい気分だ。

「チョコチップクッキーはー、チョコとクッキーがー、同時に食べれてー、すっげーおトクー」

「どういう歌なのさ……」

「オーマイダーリンー、長いものには巻かれるけれどー、家では

お母さんにつらく当たるー」

「最低だねえ。ちよつと、ヘッドフォン取りなよ」

「手を繋ごうとー、きみが言ったからー、ぼくはおもむるにー、ラジオペンチで……あれ、ツバキ」

「ちよつと続き気になるよ……。今まで無視してたくせになんでもいいところでちよつと気付くのさ」

いい気分で歌っていたせいで、部屋にツバキが入ってきていたことに気付かなかった。ツバキはなにやら興奮しているようだ。

「なんか用？ おれは今アートに触れるので忙しいんだけど」

「アートには聴こえなかったよ……。あのね、あんたの歌声、うるさいよ」

「なめくじにー塩をかけて溶かすー、犬の鼻はー今日も濡れてるー、氷製のナイフでーキミを殺してー、溶かして飲んで証拠隠滅ー」

「無視？ ていうかその歌ホントに教育上よくないから」

「大丈夫だよ。サスペンスではもう使い古されたトリックだから。もし万が一のことがあっても責任は問われないから」

「サスペンスでは溶かして飲んではいないから……いやいや、そういう問題じゃなくて」

「なに？ なんの用なんだよ」

「えつとね、ちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど」

「『お願いします』は？」

「あのね、ちよつと食器棚の開き戸の建てつけが悪くなって」

無視ですか。そうですか。

「あたしはよく分かんないから見てほしいんだけど」

「『お願いします』は？」

ワン・モア・トライ。

「やっぱ、そういう作業は家族の中ではコウタが一番適任だと思うんだよね」

ワン・モア・スルー。

「お父さんはあんまり家にいないし、ダイキもまだ中学一年生ですよ？」

「ぼく三歳」

「あたしやカスミよりはコウタの方が向いてると思うしね。お願いしていい？」

「……りようかい……」

エバーラスティング・スルー。おそらくフォーエバー。

*

食器棚を見てみた結果、開き戸の根元で扉を支えている蝶番（ちょうばん）からネジが外れてしまっていた。

「これくらい自分でやれよ……」

思わず不満が口をついた。

ネジが外れているなら、要はネジを巻きなおせばいいだけの話。簡単な作業だ。

バイトから帰ってきて疲れているおれがわざわざやらされる作業じゃないと思う。

作業はおれがツバキに指示を出して工具を取ってもらい、それを使っておれが作業するという形で行われた。

「ネジ」

「どの大きさ？」

「あんま長すぎない……あ、それ。そのポケット部分に入ってるやつ」

「これね。はい」

「プラスドライバー」

「はい」

「メス」

「絶対言つと思つた……ないよ、そんなの」

「ゆば」

「は……ゆば？ ええ？」

「おはし」

「食べるの？ 今？」

「ケチャップ」

「ゆばにケチャップかけるの？ ええ？」

そんな感じで、ゆばに想いを馳せながら順調に工程をこなしていく。貧乏性の父親が保管しておいたネジがあつたので、ドライバーでネジを回していく。ネジ穴に錆びた金属をねじ込む、きいきいと不快な音が室内に響いた。

錆びているせいで、ドライバーを回してもネジがなかなか穴の奥に入っていかなかったが、しょせんネジを一本穴にねじこめばいいだけの作業である。

ほどなくして簡単すぎる日曜大工は完了した。

「終わったの？」

「ああ」

「へえ。どれどれ」ツバキは何度か開き戸を開閉してみせる。「うん。直ってるみたいだね。ありがと。やっぱ、コウタに任せてよか

ったよ」

「おれは褒められたら天狗になって向上意欲をなくすし、叱られたらふてくされて向上意欲をなくすよ？」

「最低じゃない？」

「今までおれに対する評価が最低じゃなかったんだとしたら、評価を改めてもらいたい」

「胸張って言わないようにね。ま、とにかくありがと。助かったよ」

しぶしぶやらされた作業ではあったが、感謝されるというのめなかなか悪くない。なんて思いつつも、おれはツバキに適当な返事をする。

まあ、なんにせよこれでやっと音楽鑑賞に没頭できるってもんだ。わずらわしい作業を終えたおれは、ようやくと言った思いで部屋に戻った。早速ひとりコンサートを再開するとしてよう。

「カツカレーからー、カツをー抜いたものをー、おいしくいただくー、なんならカレーもないー、ごはんしかないー、だけど気分はカツカレー」

その時、ばん、という大きな音とともに部屋のドアが開いた。おれは驚いてそちらに目をやった。

そこには、カスミが微かに眉を吊り上げて立っていた。普段から無表情な彼女がこういう表情をする時。それは、かなり怒っている時だ。

「コウちゃんのキ。ガイじみた歌がうるさくて勉強できない」

「あんまり褒めるなよ、照れるから」

「……コウちゃんの頭のネジ、私がつけてあげる」

カスミの手には、おれがさきほど使っていたプラスドライバーが

握られていた。

どうやら、今度はおれが日曜大工される番らしかった。

第四話 長男と長女と平日なのに日曜大工（後書き）

ゆばって書きたいだけだったり。

第五話 長男と次女とヒマのもてあまし方

「ヒマだな」

「ん」

今週の話題の新譜、「レバニラ炒めーズ」の「今日の占いカウントダウンに逆上して通行人を釘バットで……ノアナコンダの体液で味噌汁を作ったら三日三晩苦しんだ」という両A面シングル（オリコン初登場百五十二位）を聴くのにも飽きたおれは、リビングのソファで足を組みながら雑誌を読むカスミに声をかける。

ツバキは同窓会とかで今日は遅くなるらしい。ダイキは友人の家に泊まりに行ってしまったし、例によって父親も遅くなるそうだ。

カスミと二人きりというのも久しぶりだ。

「カスミー、おれと一緒にヒマを持て余そうぜ」

「ヒマならもう持て余してる」

「もっとアグレッシブかつ飛ぶ鳥を落とす勢いでヒマを持て余そうぜ」

「そう。がんばって」

「おう！ サンキュ！」

「いいえ」

うーん。さつきから薄々思っていたんだけど、なにかが変だ。

「で、アグレッシブかつ飛ぶ鳥を落とす勢いでヒマを持て余すにはどうやればいい」

「知らないわ」

「じゃあ一緒に考えようぜ」

「いや」

「ツンデレめ」

「意味が違っわ」

「マニフェスト！」

「……なに」

「いや、言いたかっただけ」

「そう」

変だ。なにかがおかしい。どうもいつもの調子が出ない。

「あ、そうか」

「なに」

「ツッコミがないんだ」

「……そうね」

カスミもこの空気のおかしさを薄々勘付いてはいたらしい。役割で言えば、基本的にはおれやカスミがボケで、ツバキやダイキがツッコミだ。

「って誰がボケやねん！」

「コウちゃん。今のツッコミ、二点」

「何点満点で？」

「十点満点で」

「ならよし！」

「そう」

どうしようか。ボケても誰もツッコんでくれない。このままでは収まりがつかない。

「なあ、カスミ。ツッコミやってみない？」

「いや」

「ツンデレめ」
「意味が違っわ」

期せずして天井になった。

ちなみに、天井というのはお笑いの用語であり——説明が面倒だから辞書引け。載ってないけど。

「おし、じゃあおれがツツコミやってみる」
「そう。がんばって」
「おう！」

「……」
「……」
「……」

「ボケろや！」
「なんで？」

「ツツコミやるつつってんだからボケるのが礼儀だろ！」
「初耳だわ」

「なんでやねん！」
「今のは別にツツコミどころじゃない」
「いい加減にしなさい！」
「だから、ボケてない」
「とにかく！」

無理やり一旦仕切り直す。

「ツツコミやるつつってんだからボケろ」
「いや」
「ひとりでツツコミ宣言してるおれが変な人みたいだろ」
「コウちゃんが変なのはいつものこと」
「ならよし！」

「……」
「……」
「コウちゃんかもしもコメディアンだったら」
「うん」
「司会進行は出来ないわね」
「……うん。カスミもな」
「……ええ」

お通夜か葬式のような沈黙。交通事故にでも遭ったかのように、
予期せずして突然自分の限界を知ってしまった。

「ただいまー」

その時、元気な声が家の玄関に響いた。この声は、ダイキの声だ。

「あれ。おまえ、今日は泊まりじゃなかったの」
「や、なんかユウジくんのお母さんが具合悪くなっちゃって」
「ダイちゃん、おかえり」
「おうカスミ！ ただいま！」

カスミの言葉におれは片手を上げて爽やかに返事をする。

「帰ってきたのはおれだろお！　なんでコウが『ただいま』って言うんだよお！」
「自分ひとりが帰ってきたと思うな！」
「帰ってきたのはおれひとりだよ！」

戸惑っているような怒っているようなダイキの言葉。

「……ツッコミがいるっていいなあ」

「そうね」

思わず、かすみとふたりでしみじみしてしまった。そんなおれたちに、ダイキは不思議そうなまなざしを向ける。

「なんの話？」

「うつさいおまえは許可出すまで喋るな！」

「何様だよ！」

「別に何様でもない。けど、いじられて目を潤ませているダイちゃん是不様」

「な、泣いてないもん！」

律儀にツツコミを入れつつも、やはりダイキは目を潤ませていた。

「……いじられ役がいるっていいなあ」

「そうね」

「だからあー、なんの話なんだよう」

ああ、わが兄弟の素晴らしきかな。

第五話 長男と次女とヒマのもてあまし方（後書き）

駄作。

第六話 長男と次男と国語の宿題

「なあ、コウ」

「なんだチンチクリン」

「チンチクリンって言うな！」

おれがバイトを終えて我が家の玄関のドアをくぐると、まるで待ちかまえていたかのようにダイキが飛びついてきた。

犬みたいなやつだな、なんて思いながら、脱いだ靴をそろえるのもそこそこに、おれは寝間着に着替えるべく自室にむかった。ダイキはその後についてくる。

「今日さあ、学校で国語の宿題が出たんだ。自分の好きな言葉を書いて、その意味を説明しなさいってやつ」

なんかアバウトな宿題だな。

「宿題ねえ。それで」

「手伝ってくれよ」

「ふざけんな死ね」

「そこまで言うか！」

「もっかい言うぞ。ふざけんな死ね」

「もっかい言うな！」

「だいたい、なんでおれなんだよ。ツバキもカスミもいるだろ」

自分の部屋のついたおれはベッドに腰掛けた。ダイキもちゃっかりおれの部屋に入ってきて、おれの隣に腰を下ろす。

「ツバキちゃんは仕事で忙しそうだし、カスミちゃんにお願いした

ら『めんどくさい』って言われた」

「じゃあ、おれもめんどくさい」

「頼むよー。もうコウだけが頼りなんだよ」

「情けない弟だな、おまえは。少しは自分で考えるとかないのか」

「自分で考えても答えが浮かばないからこうして頭を下げてるんだろ。分かんないかなあ」

こいつの脳内ではこいつのうのをく頭を下げる>と言うのだろうか。だとしたらこいつは宿題どうこう以前に、基本的な日本語から勉強しなおすべきだ。

「頼むってば。明日の国語の時間に宿題の内容を発表しなきゃいけないんだよ。このままだと恥かいちゃうよ」

「恥をかくのも勉強のうちだ」

「手伝ってくれないと死ぬぞ」

「ばか！ 冗談でも死ぬなんて言うな！」

「自分はさっきおれに『死ぬ』って言うたくせに」

「あれは冗談だ」

「あんた言ってることムチャクチャだよね！」

律儀にツツコミを入れつつも、ダイキがおれの部屋から出て行く気配はない。おれは小さくため息をついた。

「まったく、仕方ないな。なんだっけ？ 国語の宿題？」

「え、なに。協力してくれんの？」

「んー、どうしよっかなー」

「え。協力してくれんじやないのかよ。思わせぶりな態度とんなよな」

「なに、その偉そうな態度。協力してほしくないわけ」

「あ、いや……。協力してほしいです、はい」

背に腹はかえられないとでも言うように、急に小さくなるダイキ。中一にしてこんなに卑屈でいいのだろうか。

ともあれ、そんなダイキを見ているうちに、なんだかイタズラしたい気持ちがおれの中に芽生えてきた。

「お願いします、だろ？」

「お願いします……」

やけにへりくだった十二歳のガキを見て、おれの中のイタズラ心——別名、加虐心ともいう——がどんどん膨れ上がってくる。

「声が小さい！」

「お願いしまあつす！」

「もっと大きな声で！」

「お願いしまあつすっ！」

「スタッカートで！」

「お、ね、が、い、し、ま、す！」

「ラッパー風に！」

「YO！宿題の手伝いお願い！でも正直ぼくはもう寝たい！」

「韻を踏んだなあまえ！何メイシだあまえ！何ンジレンジなんだあまえは！じゃあ次は偉そうな態度で！」

「一緒に宿題の答え考えろつつてんだろ！早くしろよ！」

「調子のんなブチ殺すぞブタ野郎！」

「ひいっ！」

おっと。思わず声を荒げてしまった。

ダイキは下手すれば引きこもりになってしまいそうなほど怯えている。ガタガタ震えているし、目は涙で潤んでいる。

この軟弱な弟を、さてどう鍛え直してやろうかと考えていたその

時、部屋の外からバタバタと足音が聞こえてきた。

「ちょっとコウタ。なに大声あげてるのさ。ダイキがびっくりしてるじゃない」

ツバキが驚いた表情で顔を出す。

その後ろではカスミが、さして興味もなさそうな「どうせいつもの発作でしょ」とでも言わんばかりの表情でこちらを覗きこんでいた。

どうも、今のおれの声に反応して、何があつたのか確認に来たらしい。

「秘書がやりました」

「なんでそんなすぐにばれる嘘つくかなあ」

あきれたように自分の髪をくしゃくしゃと軽くかきむしるツバキ。

「嘘じゃない。ユーモアだ」

「ダイキ、完っ全に怯えてるけど」

見ると、ダイキは普段の小生意気な姿からは想像もつかない弱々しい態度で、ツバキの陰にかくれていた。

「ユーモアの分からない人間だな。つまらない大人になるに違いいな、こいつは」

「自分の非を認められない大人よりマシじゃない？」

薄く目を開いて、おれを軽く睨みつけてくるツバキ。

「自己嫌悪ならよそでやってくれ」

「自分のこと言われてるって分からないんだね、可哀想に」

まったく、相変わらず意味の分からないことを言う姉だ。

「ダイキ。なんでこうなったの？」

もうおれとの会話のキャッチボールをあきらめたのか、ダイキに状況を聞こうとするツバキ。

「う、うん。学校の宿題を、コウに手伝ってもらおうと思って……」
「なんだ。コウタ、それくらい手伝ってあげたらいいじゃない」

小学生の宿題くらい簡単でしょ、という接尾語が聞こえてきそう
なほど軽い調子でツバキは言った。

「まあ、仕方ないな、ダイキ。おまえがそこまでして一緒に考えて
ほしいっていうなら、考えてやらないこともない」

おれがそう言つと、今まで借りてきた猫のようだったダイキの表
情がぱっと明るくなった。

「う、うん」

「よかったね、ダイキ。じゃ、あたしは明日の仕事の案件をまとめ
なきゃいけないから。コウタ、ちゃんと教えてあげなよ」

「あたばーよ。おれは世間ではく教え上手の鈴木さんって呼ばれ
てるんだからな」

「そっか。それ、確実に別人だけど、よかったね。じゃ、がんばり
なよ」

流された。ツバキは何事もなかったかのように部屋を出て行く。

うーん、ちょっと寂しい。

ちなみに、ツバキは出ていったが、なぜかカスミはおれの部屋に残っている。相変わらず口数は少ないけど。

「コウ。それで、どんな言葉を書いたらいい？」

「ん。なんだっけ」

「だから、好きな言葉とその意味」

「うーん。そうだな。こんなのはどうだ」

「う、うん」

期待に満ちたダイキの目。おれはたつぷりと間を置いて、その言葉と言った。

「外はカリカリ、中はトロトロ」

「……何だソレ」

拍子抜けしたようなダイキの声。

「なんかうまそうじゃね？」

「意味は？」

「聞いて驚くなよ。なんと、外はカリカリなんだけど、中はトロトロなんだ！」

「だから何がだよ！」

「たこ焼きかなんかじゃねーのうつせーな殺すぞ」

「ホントキレルスイッチ分かんないっすねあんた！」

ダイキも今回の暴言には怯えることなくツツコミ通してみせた。腕をあげたな弟よ。

まあ、多分さっきのは暴言にじゃなくて凄んだ怒鳴り声に怯えて

いたんだろっけ。中学一年生に対して凄んだ怒鳴り声をあげるの
はどうなのよ、とか言っな。

「コウちゃんなんか訊いても無駄」

声のした方を見ると、それまで黙っていたカスミがかわいそうな
ものを見るようなあきれた目でおれを見ていた。

「いい、ダイちゃん。宿題の答えをコウちゃんなんか期待しちゃ
だめ。コウちゃんの頭にはネジ穴がないんだから」

頭のネジが飛んでいるところか、おれの頭にはその穴さえ用意さ
れていないらしい。うまいこと言っなあ、こいつ。

「コウ、変なところでキレるくせに、なんでこんなひどいこと言われ
てもキレイなんだよ」

口げんかではカスミに勝てる気がしないからだ、とは言いつらい
ので黙っておく。

「じゃあカスミちゃん。一緒に考えてくれよう」

「甘えないで、このド低能。あなたのツルツルの脳みそではどう
頑張ったところであきれるほどレベルの低い答えが導き出されるの
は火を見るより明らかだけれど、考えること、努力することに意義
がある。それが報われるかどうかは別の話だけど。ていうか多分報
われない」

「ひ、ひでえよ。カスミちゃん」

毒を吐く時だけやたら饒舌なカスミの言葉を受けて、ダイキはま
たもや半べそである。まあ、さっき「めんどくさい」って理由で宿

題の手伝いを断ったらしいしな、カスミ。

「と、言いたいのはやまやまだけど。まあ手伝ってあげないこともない」

「言いたいのはやまやまつーか、完璧に言っちゃってるけどな」
「横槍入れないで、コウちゃん。それじゃあダイちゃん、始めましよう」

ダイキの講師はいつの間にかおれからカスミへ完全に移っていたのだった。

外はカリカリ、中はトロトロのどこがいけないんだ。うまそうじやん。ねえ？

第六話 長男と次男と国語の宿題（後書き）

たこ焼きが食べたくなってきた。

第七話 長男と次女と次男と国語の宿題（前書き）

前回（第六話 長男と次男と国語の宿題）の続きです。
今回のタイトル、長い上にかなり語呂が悪いですね。

第七話 長男と次女と次男と国語の宿題

前回に引き続き、ダイキの宿題を手伝っているおれとカスミ。

いや、前回の終わりにおれは講師を降ろされたので、カスミがダイキに宿題を教えている、というべきか。

「まずは、先生がどうしてこんな課題を出したのか、その意味や理由を考えなきゃいけない。ダイちゃん、どうしてだと思う」

「どうしてって……言葉に興味を持たせるためとか、ものを調べる大事さを知るためとか、じゃないの」

「だからあなたはダメ。ちよつと考え方を改めた方がいいわ。ていうかもう死んじゃえよおまえ」

「ひ、ひでえよ。カスミちゃん」

今日何度目かの台詞をリピートしてみせるダイキ。まあ、確かにこれはひどい。ダイキの、中学一年生にしてはかなりの確——だと少なくともおれは思う——言葉も、カスミの意に沿わなかったらしい。

「いい、ダイちゃん。先生がどうして、好きな言葉を書き出してその意味を説明させようとしたのか。そのことに何の意味があるのか、よね」

「う、うん」

「それはね、ダイちゃん」

「うん」

なんだかおれもカスミの答えに興味が出てきた。固唾をのんでカスミの言葉を待つ。

「先生に訊いて」

「え」

「そんなの私に分かる訳がないでしょう。その宿題を出したのは先生なんだから、意味とか理由とか知りたいなら先生に直接訊けばいいじゃない」

こうなるまでの過程を全部ブン投げて考えるなら、なるほど合理的な結論だ。

「え。だって、カスミちゃんが今、意味を考えろって」

「そんなこと言っていないわ」

「え、いや、でも」

「言っていないわ。訴えるわよ」

「ひ、ひでえ」

確かにひどいことを言っているのだが、おれの理不尽にツッコむ時のような勢いはダイキにはない。遊佐家で一番強いのは誰なのかを象徴するような光景だった。

「先生がそんな宿題を出した意味。本当はそんなことはどうでもいいの。意味なんてものを考えず、とりあえず上の言葉にはいいに従っておく。先生はあなたがた生徒にそういう処世術を身につけさせようとしているのよ」

確かに大人になったらそういうことも必要なのかもしれないが、あまりにも身も蓋もない言い方だ。

「分かった？　じゃあ本題。好きな言葉とその意味、ね」
「う、うん」

カスミは強引に話を進めていく。

「ただ漠然と好きな言葉、と言われても、選択肢が多すぎて難しい。だから、まずは取っ掛かりを見つけたことが大事」

「取っ掛かり？」

「そう。例えば、あなたは何かが好き？　なにをしているのが一番楽しい？」

「えっと……友達とサッカーするのとか」

「じゃあサッカーでいい。サッカーを楽しむっていうだけでも色々な状況があるわ。ワールドカップやオリンピックで日本中がサッカーに熱狂している時もあれば、たまたま見かけた草サッカーチームの試合を応援しているだけでも立派にサッカーを楽しんでいると言える。自分がプレイヤーとしてグラウンドに立っている時もそう」
「う、ん。そうだね」

早口で言い切るカスミの言葉を自分の中で咀嚼するように、ダイキはゆっくりとうなずいた。

「その状況を考えるだけでも浮かぶ言葉がいくつもあるわ。興奮、熱狂、一生懸命、勝負、連帯感、拳は内側に挟り込むようにして打つべし」

なんか今、ボクシングのトレーニングをしてるヤツがいたな。

「ほかにもある。真剣、努力、勝利、熱狂、信頼、プレパレート」
理科の実験中によく割るやつな。プレパレートって言いたいだけ
だろこいつ。あと、熱狂って二回言ったなこいつ。

とは言ったものの、カスミは即席の講師としては及第点と言える
ような的確なアドバイスが出来ていると思う。おれほどじゃない
が。

「ね。ひとつ取っ掛けりを見つけるだけで、言葉なんてこれだけ浮
かんでくるものの」

「うん。なんとなく分かった気がする。すごいや、カスミちゃん」
「図に乗らないで。ちよつと話を聞いただけですぐ分かった気にな
って先走るなんてバカな証拠。だからあなたの人生オフサイドばっ
かりなの」

意味はよく分からないが、なんとなく切ない言葉だった。

「それじゃ、今話した内容を踏まえて、ダイちゃんなりに考えてみ
て」

「う、うーん。分かった、とにかくやってみる」

*

「で、どうだった。宿題の結果は」

翌日、バイトから帰ってきたおれは、ダイキの顔を見て宿題の一
件を思い出した。

「なんだよ、急に。心配でもしてくれてたの」

「ばっか、めっちゃめっちゃ心配してたっつーの。心配すぎて夜しか眠れなかったっつーの。しかも八時間くらいしか」

「快眠じゃねえか！」

「八時間も寝たから退屈な講義中に昼寝も出来なかったし、ご飯も喉を通らなかったっつーの。カレーしか通らなかったっつーの」

「単なる昨日の夕食だろそれ！」

「どうしてくれんだこの野郎！」

「だからそれおれのせいじゃないってば！」

ぬう。腕を上げたな弟よ。

あとは、ツツコミにもう少しひねりが入れられれば最高なんだけど。

「で、どうだった結果は」

ダイキだってバカじゃない。なんせ、カスミのあのアドバイスを聞いたあとだ。悲惨な結果はまずないだろう、とおれは気楽に考えていた。

「……叱られはしなかったけど、なんかみんなに笑われた」

「は？ おまえ、結局なんて言葉にしたわけ？」

予想外の答えに勢いを削がれたおれは、その原因をダイキに尋ねた。

「いや、昨日のカスミちゃんのアドバイス通りに考えたんだけど」

「ああ。だからなんて言葉にしたんだよ」

「ワールドカップ」

……なるほど。カスミのアドバイスの「取っ掛かり」の部分そのまま答えにしてみましたらしい。

教授された言葉をそのまま飲み込み、それを消化しきらないままバカ正直に答えを出してしまったというわけだ。

「……ダイちゃん、バカだから」

陰でおれたたちの話を聞いていたらしいカスミがポツリと言った。

前言撤回しよう。良くも悪くも弟はバカだった。

どうリアクションすればいいか分からず頭をかくおれと、呆れたように小さくため息を吐いたカスミをよそに、ダイキはひとり頭に疑問符を浮かべるのだった。

第七話 長男と次女と次男と国語の宿題（後書き）

ちなみに言葉の意味として発表したのは

「四年に一度開かれるサッカーの祭典」

意味じゃないしね、これ。

第八話 長男と友人と大学のできごと1

久しぶりに、今日は朝から真面目に大学で講義を受けていたおれ。

今日の履修科目の講義も全て終了し、さてどこに行こうかと考えてながら大学のキャンパスを歩いていた時、背後から不意に誰かが声をかけてきた。

「おう、コウタ」

その人物を見た途端、おれのテンションは一気に下がった。

「なんだ、宇宙戦艦かよ」

「宇宙戦艦って呼ぶな！ 知らない人が聞いたら、苗字が宇宙で名前が戦艦だと思われるだろうが！」

思わねえよハゲ。

「で、なんか用か。大ヤマト」

「大は余計だ！ あ、でも、将来ビッグになるおれには相応しいかも？」

「相応しいかも？ じゃねえよ。ハゲのくせになにがビッグだハゲ。おまえの名前なんて別になんでもいいんだよ。このハゲ王国の調子こきハゲ大王が」

「意味分かんねえ呼び名をつけるな！ あ、でも大王ならもしかして偉いのかも？ あとハゲてないから！ ハゲてないかねえ！？」

何を興奮しているのか、ごちゃごちゃとやかましくわめいているヤマト。

ワックスやらヘアスプレーやらで重力に逆らった髪形を作り出し、

ラインストーンやらラメやらがいっぱいに施された服で全身をコーディネートしている。俗に言う、ギャル男ってやつだ。

音楽やら芸能方面でなにかしらの活動をしているわけでもなく、本気でスポーツもやってこなかったくせに、二十歳にもなって「おれは将来ビッグになる」と言ってはばからない、要はイタイ子である。

中学、高校とこいつと同じ学校に通う羽目になったただで自殺願望が芽生えてくるほどうんざりだったのに、大学も同じになるわ、専攻学科まで同じになるわで散々だ。運命の女神ってやつがいるんだとしたら、おれに嫌がらせして抱腹絶倒してるとしか思えない。

誤解のないように言っておく。

おれは別にこいつのことが嫌いなわけではない。ただ、うざいだ。

腐れ縁でちょっとつるんでいるというだけで、こいつと同じ類の人間だというレッテルを貼られていると考えると、おれは恥ずかしさで悶えそうになる。

「いやー、しかもうすぐゴールデンウィークですなー。コウタさん」

もみ手をしながらこちらにすりよってくるヤマト。うざい。

「……言いたいことがあるなら言えば？」

「オナナ紹介しろ」

三秒前までの卑屈さはどこへやら。ヤマトは簡潔かつ傲慢な希望を述べてみせた。

というか、ゴールデンウィークとオンナを紹介することには一体どんな因果関係があるのだろう。

まあ、こちらとしてもただでそんな話を飲む気はない。向こうにメリットがあるのだから、交換条件を持ちかけるくらいの権利はおれにもあるはずだ。

「じゃあさ、オンナ紹介したら、おまえ死んでくれる？」

「死なねえよ！ そのなにかを期待する無垢な子供のような目はやめろ！」

「じゃあそんな条件は飲めません」

「おまえなあ、おれみたいな未来の偉人がそんな小さなことで死んだら、国民全体のテンションに関わってくるだろうが」

「そうだな。うわっしょい！ らっせーらっせーらっせーらー！
つてなるだろうな」

「なんでテンションマックスでお祭り騒ぎなんすかね、そこ！」

自分の人望のなさにつまたく気付いていないヤマト。ここまでいくと呆れるを通り越して感心する。

「とにかく、期待してるからな！ ゴールデンウィークと一緒に過ごせるオンナのコがほしいんだから、おれ」

「しかし、その期待は考えうる限りもつとも最悪な形で裏切られることを、ヤマトはまだ知らないのであった……」

「不吉なナレーション付けるな！」

第八話 長男と友人と大学のできこと1（後書き）

現実と季節感がずれまくっていますが、そこはスルーでお願いします。

あと、このお話は後で若干、加筆修正するかもです。

第九話 長男と友人と大学のできこと2（前書き）

えーと、今回ちょっと長いです。
読みづらかったらごめんなさい。

第九話 長男と友人と大学のできごと2

ヤマトをなんとか追っ払い、ようやく大学キャンパスの入り口までたどり着いたおれを待っていたのは、またも級友からの足止めだった。

早く帰りたいという意思表示のため、チラチラと入り口に目をやるおれをよそに、高いテンションで世間話をまくしたてるオンナが一人。さらに、悪乗りする形でそれを煽るオンナが一人。

「だからさあ、高槻の講義は狙い目なのよ！ そう思わない、コウちゃん！」

高いテンションで世間話をまくしたてている方のオンナ——安住エリナがおれの賛同を得ようと唐突に話を振ってくる。

エリナは今時のオンナらしく、目のふちを黒く塗りたくって、目^{めぢ}力をやたら強調したメイクをしている。本人いわく「魔性メイク」らしい。

その「魔性」ってやつを意識してるのどうかは知らないが、服装はフェミニンなもので揃えられている。

ちなみに、彼女のいう「狙い目」とは、「大学で級友を集めて何かしのイベントごとを企画するには、高槻教授の講義の時間がベストである」ということらしい。

そんな彼女の熱に押され、おれは今考えうる最良の答えを返してやる。

「いいかげん帰らせろやボケ」

「ゴールデンウィークには遊園地とかも行きたいしー。あ、温泉なんてのもいいねー!」

その、「おれにとって」最良の答えは、案の定、無視されました。へっ。

「高槻つてやる気ねえしなー。アイツの講義、寝てるヤツばかりだし。堂々とゴールデンウィークの予定も立てれるってもんだよな、エリ」

「ねー、ミーちゃん」

オンナにはかなり乱雑な言葉遣いで、エリナを煽るオンナ――戸田ミズホ。

エリナ以上に目を強調したメイクと、不快というほどではないにせよ、至近距離では多少気になる香水の臭い。服装はヤマト同様かなり派手なものであり、端的に言うところギャルである。肌は白いけれど。

ちなみに、こいつはエリナにミーちゃんと呼ばれている。

おまえがミーちゃんってツラかよ、とツツコンでミズホに殴られたことを思い出して、おれは嫌な気分になった。

「ったく、おまえらまでゴールデンウィークの話題かよ。もっとこう、派手な話題はないわけ?」

「たとえば?」

答えを期待するというよりも、半ば条件反射で返したようなエリナの言葉を受けて、おれは考えた。

「たとえば……おまえらの実家が爆発したとか、女子寮が炎上したとか」

「おまえ、ウチらを難民にしたいワケ？」

ミズホは冷めたような目でおれを見てくる。

「自由はいいぞ？」

「自由すぎるっつーんだよ」

深々とためいきを吐くミズホ。なにが気に入らないんだか。

「ま、それはともかく。今年のゴールデンウィークは友達と過ごすハメになりそうだなー。あー、オトコほしー」

「なに。ミズホって友達いんの？」

おれの言葉を聞くや否や表情を怒りの色に変化させたミズホは、なにが不快だったのかは知らないが、返事の代わりにみぞおちの辺りに正拳突きを放ってくる。

とっさに手に持っていたバッグでガードする。ガキン、という金属を叩いたような音が響いた。

「いって！ 硬ったー、おまえ、バッグになに入れてんだよ」

自分の拳をさすり、涙目になりながらたずねてくるミズホ。

「なにって……鉄板ですけど」

「鉄板ですけど、じゃねえ！ なんでそんなもん入れてんだよ！」

「防御用。しかもそれだけじゃないぞ！ 角を鋭利にあしらえてあるから、攻撃に使えば一撃にして相手を昏倒状態にできる代物だ！」

その代わり、バグにはやたら穴が空く。なにかを得るためにはなにかを失わなきゃならない、というメッセージ性すらあわせもった芸術的な一品だ。

「危ねえだろうが！ つーか、防御用ってどういうことだよ？」

「おめーが何かって言うとすぐおれに攻撃しようとしてくるからだボケ」

「おまえなあ、ウチは曲がりなりにもオナナのコなんだぞ！？」

「おまえがおれを殴ろうとしなきゃ済む話なんじゃねーの」

「おまえが殴られるようなこと言わなきゃ済む話なんじゃねーの」

「もー！ なんでふたりともそんなに仲悪いのよ！」

会話が言い争いに変化を遂げようとした時、エリナがすんでのところで止めに入った。

「今してるのはゴールデンウィークの話でしょー！ なによ、攻撃とか防御とか」

「いや、ゴールデンウィークの話はおまえらが勝手にしてるのであるって」

「なに！？」

「あ、いや、すいません」

思わず謝ってしまうおれ。というか、おれってば謝ったの初めてじゃないか。

「でもさあ、エリ」とミズホは言った。「やっぱイベントの時には

「オトコほしくね？」

「薄っぺらいなあ、おまえは。なにかつつーとオトコオトコって」「うっさい」

おれとミズホのやり取りを今回は軽く無視して、エリナはなにかを考えているようである。

しばしの逡巡のあと、エリナはなにを思いついたのかぱっと顔をあげた。

「あ、じゃあさ、コウちゃん。ミーちゃんにさ、ヤマト紹介してあげれば？」

「はあ？ ヤマト？」

「ヤマト、って誰よ」

ちなみに、ヤマトはエリナとおれの共通の知人であるが、ミズホとは面識がない。そこを踏まえてのエリナの提案だと思うが……。

超絶ナル男のヤマトと超絶毒舌家のミズホが仲良くしている様をおれはどうしても想像できない。

それどころか、ミズホに毒を吐かれて

「ぐひーん！ このオンナがいじめてくるプー！ こうなったら舌嚙んで死んでやりゅぶぶっ！？ 痛いー、喋ってたら舌嚙んだプー！ ついてないプー！ ぐひーん！」

と、泣いているヤマトの画ばかり浮かんでくる。

いくらなんでもそんな提案をするわけにはいかないだろう。

そう考えたおれは、エリナにだけ聞こえる小さな声で言った。

「バカだな、おまえは。ヤマトにミズホを紹介するなんて、山猿に毒入りバナナ渡すようなもんだぞ。どっちもいい結果にならないの

は目に見えてる」

「んー、でもさあ」エリナは言った。「それって、ヤマトがミーチ
ゃんの攻撃の標的になるってことだよね？」

そこでエリナはいったん言葉を区切り、にこつと笑ってみせた。

「うまくやれば、コーちゃんに対するミーチちゃんからの攻撃も少
くなるかもしれないよね？」

「ミズホ、そこまで言うなら仕方ない。オトコ紹介してやっても
いぞ」

「はやっ!？」

おれの変わり身の早さに驚いた声をあげるエリナ。

しかし、エリナの言うとおり、これはチャンスだ。ミズホの攻撃
対象からおれが外れることができる上に、うまくすればそれ以上に
おいしい思いができるかもしれない。

そう考えて、おれは心の中でほくそ笑んだ。

「なんだよ、気味わりいな。なに、何が目的なわけ？」

「何言ってるんだよ。これはおれの純粋な善意からくる行動なので一
万円で結構です」

「うつわー、しかもお代まで取るんだ。腹黒ーい……」

「つーか、どこが純粋な善意だよ! めっちゃめっちゃ金銭目的じゃね
えか! この守銭奴が!」

おれにだけ聞こえる声で呆れた声を出すエリナと、腑に落ちない
という様子でかなり立てるミズホ。

「まあ、ここでボクに一万円払って楽しくイベントをこなすのか？
友達だけで寄せ集まって寂しい時間を過ごすのか？ それはあ
なたさまの自由ですから？ ボクは別にどっちでも構いませんけど
？」

「くっ、このヤロウ……！ でも、一万円はどう考えても高えだろ
！」

「高くねえよ！ バカかお前！ いいか。世の中には何万円もかけ
てエステに通い、化粧品を買い、習い事をして、自分を磨いてもだ
！ 出会いがなくて独り身の寂しい時間を過ごしてる人が、たつく
さんいるんだよ！ 出会いってのはなあ！ 本来、金じゃ手に入ら
ないものなんだよ！ そんな問題を、たったの諭吉くんひとりで解
決してやるうつつつてんのが分かんないかなあ！ こんなチャンス
もう二度とねえっつーのにさあ！」

「で、でも、大学内にだって出会いはあるだろ？」

相手は怯んでいる。もう一押しだ。

「出会いがあるのになんでミズホには彼氏がないわけ？ 分かる
よな？ それは、いいオトコと出会ってないからだ！ ミズホなん
てカワイイんだから、いいオトコとの出会いがあれば彼氏なんてす
ぐにできる！ だろ？」

びしっ、と効果音が付きそうなほど勢い込んでミズホを指差すお
れ。

「ど、どうかな……。そう、なのかな？」

「ああ、そうだね！　そうですとも！」

戸惑いつつも、まんざらでもなさそうなミズホ。こういう時は「そうかも」ではない。「そうだ！」と言い切ることが大切なのだ。さらに、一旦持ち上げて、相手をいい気にさせておくのも交渉においては大きなポイントだ。

以上、おれの交渉術の一端をお見せしました。

「いいか。出会いつてのは確かに、そこら中に転がってるかもしれない。でも、自分の恋愛対象の相手となると話は別だ！　それこそ、大学みたいに吐いて捨てるほどオトコがいる場所でも、自分の恋愛対象となりえる相手がいないんなら、そんなもんは出会いの場じゃねえんだ！　分かるな？」

「え、う、うん」

相手はもう落ちる寸前だ。おれは最後の一押しとばかりに、ミズホの耳元で甘くささやきかけた。

「いいですか。わたしは出会いの場がなくて困っている、そんなあなたに未曾有みそいうのチャンスを与えているのです。もう一度言いましょう。一万円は、リーズナブルです。たったの一万円。たったの一万円です。たったそれだけの金額で、あなたは大きな幸せをつかむ、未曾有のチャンスを手に入れることが出来るのです」

「ま、まあ、そういう考え方もあるのかもな」

「うわー、コウちゃんすつごい悪い顔してるー……」

すでにほぼおれの術中にはまっているミズホと、その横で冷静に状況を見守っているエリナ。

「よし。分かったよ。じゃあ、おまえに任せる」

しばらくなにかを考えたあとで、そう言っで一万円札をおれに渡してくるミズホ。

貧乏人の友達から金をせびってるってんなら多少心も痛むが、ミズホの家は金持ちで、彼女は未だに月に十万円も小遣いをもらっているらしい。

ので、おれの心はびっくりするくらい痛まなかった。

もうちよつと痛んでもいいんじゃないの？ というほど痛まなかった。

「じゃ、ウチはまだ講義残ってるから大学戻るな！ コウ、任せたからな！」

「あいよー。毎度あり」

たった今受け取ったばかりの一万円札をひらひらさせながらミズホを見送る。

その横から、エリナがひよこつと顔を覗き込んできた。

「こっわいオトコだねー、コウちゃんも」

「まあ、ここまで上手くいくとは思わなかったな。最初は正直、冗談半分だったし」

「……あははー」

感情のこもっていない、乾いた笑い声をあげるエリナ。

「でもいいの？ あんなに期待させるようなこと言っちゃって。提案したあたしが言うのもなんだけど、相手はあのヤマトなんだよ？」

苦笑しながらエリナが言う。エリナの中でも、ヤマトの評価はそうとう低いらしい。

「知らないね。おれはただ『出会いのチャンスを手に入れることが出来る』って言っただけで、『いい出会いを提供する』とも『ヤマトはいいオトコだ』とも、ひとつことも言ってないもんよ」

「そういうの屁理屈って言わない？」とエリナは苦笑してみせる。

だけど、こういう分が悪い交渉の時は、逃げ道も用意しておかなくてはいけない。おれの交渉術の初歩の初歩だ。

「そういう意味じゃ、ミズホとヤマトは、少なからずあらかじめお互いのことを恋愛対象として意識しながら、初対面を迎えるわけだ。人間の心理とかよく分かんないけど、その勢いである程度仲良くなえなってくれば、言い逃れもしやすいってもんだし」

「まーた悪い顔して。コウちゃんってやっぱ鬼だね」

「サンキュ。ま、でも、たまにはいいんじゃない？ こういう変わったイベントも」

「ま、恋のキューピッドってのも楽しそうではあるかもね。きつちり報酬せびつてるところが、コウちゃんらしいけど」

まるで人非人を見咎めるような目だ。

「あ、でも」

なにかを思い出したかのように、目を見開いてみせるエリナ。

「案を出したのはあたしなんだから、一万円のうち五千円はあたしのね？」

おまえだって充分腹黒いじゃないか。

第九話 長男と友人と大学のできこと2（後書き）

いつもご覧いただきありがとうございます。

流れで分かると思いますが、このシリーズはもう少し続きます。
楽しんでご覧いただければ幸いです。

第十話 長男とその友人達の出会い

ヤマトはあんな人間だから、「シャチヨサン、イイコ入ッテルヨ」。一万円ポッキリヨ」というと、手放して喜んだ。一万円もくれた。

ヤマトやミズホにとってはいいことだし、おれの財布は潤うし、いいことだらけなのだけど、ヤマトから仲介料としてもらった一万円は、またもエリと山分けという形になった。自分の手を汚していないという意味では、実はあのオンナが一番腹黒いんじゃないだろうか。

そして、ヤマトとミズホが初対面を果たす、その日が訪れた。

*

「で、ホントにかわいくて性格もいいコが来るんだろうな」

訝るような視線はヤマトのものだ。

腕時計を見る。待ち合わせの時刻である正午に差しかかるうとしていた。

そろそろミズホがここに来る手はずになっている。待ち合わせ場所である、近場で一番栄えている駅の前だ。

時間も手伝って、たくさんの人たちがそこら中を行き交っている。おれは言った。

「やっぱ今までの話はなかったことにする」

「なんつでだよ!」

「おまえの上から目線が気に入らないから」

「おまえ、そりゃ横暴だろうよ。こっちは仲介料まで払ったのに」

ヤマトは渋い顔をする。おれの口車に乗せられたとはいえ、出会いのために大金を払うこいつの姿は、悲哀を誘ったものだ。

「いや、別にそこまで飢えてるわけじゃないぜ？ いや、マジで。ただ、おまえがせっかく紹介してくれたわけだし？ 友達の顔を立てるってやつ？ いや、ホントホント。本気でしたらすげーモテンだぜ？ おれ」とはヤマトの弁。喋れば喋るほど憐れになっていくやつだ。

「もう時間過ぎてるよな、おい。本当に来るんだろうな。来るんだよな。まさか来ないなんてことはないだろうな」

こいつは、喋るたびに自分の「実はモテる」発言に信憑性がなくなっていくことを自覚しているんだろうか。

「いいから黙って待ってるハゲ。大体、時間過ぎてるったって、まだ三十秒かそこらだろ」

おれは腕時計を見ながら言った。

「おれの三十秒は常人の十秒に匹敵すんだよ」

「よっぽど尊くないんだな、おまえの時間は。なかなか自己分析が正確だな」

「え？ は？ なに言ってるの、おまえ」

自分の言葉の中にある間違いに気付かないらしい。こいつはバカ

のくせにインテリぶって自爆することがたびたびある。

「コウ」

自分と呼ぶ声に気付き、おれは振り返った。そこに立っていたのは、案の定ミスホだった。

「お。来たな」

「待った？」

キャラに合わない気遣いをするミスホ。こう見えて案外、緊張しているのかもしれない。

「ヤマト。こいつがミスホ」

「よろしく」

笑顔を作ることもなく、かといって愛想がないというわけでもない、というような微妙なニュアンスでミスホは挨拶してみた。対するヤマトは、なぜかは分からないが目を丸くしていた。

「で、こいつがヤマトな」

「星野ヤマトだよー。ミスホちゃん、よろしくねえー」

わざとらしく可愛らしさをアピールするヤマト。そういえばこいつ、ちょっと前に「今はオラニヤン系が旬なんだよ」とか訳の分からないことを言っていた。

どうせギャル男系の雑誌からの受け売りだろう。

「コウタ。ちょいちょい」

少し離れた場所からおれを手招きするヤマト。
おれは仕方なくヤマトに近づいた。

「あんだよ殺すぞハゲ」

「思ったより美人なコじゃなか！ よくやった、褒めてやる！」

ヤマトは相変わらず上から物を言ってきた。

満面の笑みだ。

対するミズホの表情をのぞき見ると、なんだか怪訝な表情をしていた。

まあ、他人の内緒話なんて、見てて気分のいいものじゃないだろう。

だからと言って、ヤマトに人情の機微なんてものを説いても時間の無駄だ。

とにかく、第一印象だけで言えば、ヤマトはミズホのことを気に入ったようだ。

どうでもいい相手なら、わざわざキャラ作りをしたりしないだろう。

ミズホも外見だけならおそらく「美人」と言われる部類に入る、ということなんだろう。

そもそもヤマトは、初対面にして瞬時に人間性の善し悪しを判断できるほど、頭がよくも観察眼に秀でてもない。それ以前に、そうしようとする意識もおそらくないのだろう。

問題はミズホだな。

可愛らしさを狙って笑顔を作っているヤマトは放っておいて、おれはミスホを少し離れた場所に連れ出した。

「どうだ。ヤマトの第一印象は」

「なんか……話し方がキモイ」

とりあえずオラニヤン系は失敗したらしい。
キャラ作りが裏目に出る。そんなシーンを目の当たりにすると、
こつも痛々しいものなんだな、と思った。

*

簡単な挨拶を済ませた二人を置いて、おれは家に帰った。

二人もいい年齢なんだし、初対面と言えど二人きりでもコミュニケーションは取れるだろう。

満面の笑みでおれを見送ったヤマトと、なんだか苦い顔で、おれに残ってほしそうにしていたミスホ。

元々うまくいくとは思えなかった計画にさらに不安要素が混ぜ合わさった気がした。

なので、変に話がこじれる前に逃げ出したというのが本音だ。

夕方頃には、二人の恋の架け橋役を買ってでていたことなどすっかり忘れ、おれは衛星放送のサッカー中継、バルサミコ酢FC対フアンタジスタ田嶋組の試合を視ていた。

バルサミコ酢FCが華麗なオーバーヘッドキックを決めたかと思えば、フアンタジスタ田嶋組が教科書どおりの素晴らしいヤクザキックを放つなど、試合は一進一退の攻防を見せた。

ただ、ひとつ気にかかるのは、ヤクザキックを放った選手がなぜ

か退場してしまったことだ。キックした際に足首でも痛めたのだろうか。心配だ。

息もつかせぬ攻防戦の末、結局ファンタジスタ田嶋組に退場者が続出し、規定参加人数を割ってしまったため、バルサミコ酢FCの勝利となった。

ケータイが鳴っている。

熱狂の余韻の中にいたおれは、その音で我に返った。

ディスプレイに表示されている発信者名は、<バカ>。

おれは通話ボタンを押した。

「もしもし、バカ？」

「バカじゃねえよ！ 天才だよ！」

電話口から響いたのはヤマトの声だった。正直その返しもどうなんだろう、と思った。

「コウタ。おれ今さあ、中央区の三丁目にあるカフェにいるんだけど、例のコと一緒に」

「ああ」

例のコという表現に、よそよそしさを感じる。

心なしか、ヤマトの声が涙ぐんでいるように聞こえた。

「話が違っじゃねえか、ちょっと来い」

「やだね」

「いいから来いよ。おまえが企画した話だぞ」

「やだよ」

「どうせヒマしてんだろ？ いいから来いって」

「んー。それがヒマじゃないんだよな。今、我が家の周りだけ局地的な大雪が降って、家に閉じ込められてるんだよな」

「局地的すぎるだろ！ ウソつけよ！」

「ウソじゃないって。そのうえ雪の上には点々と血痕が付いてるわ、弟の部屋でバラバラの死体が発見されるわで大変なんだってば」

「だからウソつくな！ なんでお前のウソはいちいち血なまぐさいんだよ！」

「しかも、おれのウソ彼女がおれの脳内で三角に折りたたまれて死んでんだよ。静かに喪に服させろ」

「ウソ彼女ってなんだよ！ 寂しすぎるだろ！ しかもなんだその変死体！」

「おまえさあ、公の場にいるんだろ。さっきから変死体とか血なまぐさいとか、物騒なことばっか言っつなよ」

「おーまーえーのーせーいーだーろーおーがー！ いいから来い！ いいな！」

そう言って、おれの言葉も聞かずに通話を切るヤマト。

ヤマトの声は、ずいぶんと鬼気迫る感じだった。

きつと、よほど切羽詰まっているんだろう。

おれが来るのを今か今かと待っているに違いない。

さすがにあそこまで言われたら仕方ないな。さ、寝るか。

第十話 長男とその友人達の出会い（後書き）

寝た。

第十一話 長男とその友人達のその後

「あ、コウじゃん」

ヤマトからの電話を子守唄代わりにしたら、いつもより良く眠れた――そんな陰惨な事件から一夜明け、大学の構内を歩いている時、ミズホがおれに声をかけてきた。

「おう、ミズホ。昨日はどうだった」

「うん。星野は思ったよりいいヤツだったな」

「マジで?」

このオンナは正気なのだろうか。よりによってヤマトをいいヤツとは。

おれがミズホの好みを疑いはじめた時、おれの予想をくつがえすようにミズホが口を開いた。

「なんかさ、Mっぽい雰囲気だしてるじゃん、星野って。なんかいつも以上にポンポン言いたいこと言えちゃったし、いいストレス解消になった」

「……」

いつもはこいつなりに、良識の範囲内で毒を吐いているところとだろうか。その枷をはずして、思う存分毒を吐くミズホ。考えただけでぞつとする。

なんにせよ、ヤマトはミズホの単なるストレス発散のためのはけ口になってしまったらしい。

「なんか話してる最中、ずっと涙目だったけどな、星野」

想像に難くない光景だった。

……まあ、楽しんだみたいで何よりだ、うん。ヤマトだってMなんだからうれしかったに違いない。うん、そうに決まってる。

そんな感じでミズホに昨日のデートの様子を尋ねていると、不意に横から見知った顔が視界に入った。

「……コウタ」

そう。今にも死にそうな声で話しかけてきたのは、星野ヤマトその人だった。

ヤマトの表情をうかがう。ヤマトは、おれを食い殺さんばかりの勢いでにらんでいる。鋭利な刃物のような視線だ。

目は口ほどに物を言う、とはこういうことを言うんだろうか。

その目は口よりも雄弁にこう語っていた。

「感謝してるよ親友よ。こんなにステキな女の子を紹介してくれるなんて。おれさあ、明日付けで彼女と籍を入れようと思うんだ。ハネムーンはサイパンがいいかな、なんて思ってたさ。で、いつか彼女との間に子供が生まれたら、名前ももう決めてあるんだ。女ならあびる優、男ならカール・ゴツチ……なんて。ははっ。まだ気が早すぎるよな。でも、彼女とならそんな夢物語も叶えられそうな気がするんだ。とにかくおまえのおかげでこんなステキなハニーと知り合えて、おれは本当に幸せだよ。おまえは本当におれの一番の親友だよ」と。

だから、おれはそんなヤマトの溢れんばかりの感謝に全力で応えるべく、こう言った。

「おまえなんか親友どころか友達ですらねえよ」

「はあ！？ 意味分かんねえ、いきなり絶縁宣言かよ！ そりゃこ
っちの台詞だ！ ちよつと来い！」

そう言っておれをミズホから離れた場所に連れ出すヤマト。

「なんだよ。話があるなら早くしろよてめー殺すぞ」

「えらい高圧的っすねあんだ！」

「っーかおまえ、おれが寝てる間に着信履歴いっぱいにするのやめ
てくれない？ 相手がおれじゃなかったら半殺しにされてるかもし
んないけど、相手がおれだったばかりにおまえ全殺しだよ？」

「相手がおまえじゃなかったらそんなことする必要ないですからね
！」

ヤマトはえらく興奮しているようだ。

「なんだよ。なに興奮してんの、おまえ」

「おい、コウタ」

「ん」

「おまえ、この間おれにこう言ったよな。『かわいくて性格もいい
コがおまえを待ってる』って」

「うん」

「おまえ、アレのどこが性格いいんだよ！ 話しててちよつと自殺
願望芽生えたわ！」

「え？ じゃあもうちよつと頑張れば、ヤマト死んでくれんの？」

「なんで殺す気満々なんだよ！ ていうか、もうちよつと性格のい
いオンナいなかったのかよ！？」

「仕方ないじゃん。おまえみたいに三歳児の作った泥団子みたいな

顔してるやつには、多少なりとも欠点のあるコしか寄ってこねえんだって」

「どんなだよ！ 普通に傷つくわ！」

「ヤマトが傷ついたところでおれの心は痛まないから別によくね？」

「おまえ、それは思っても言っちゃダメだろ！」

「そもそもおまえなあ。年頃の女の子になんて失礼なこと言っただ。十分いいコじゃねえか。おまえみたいに冴えないやつが女の子に好かれるチャンスなんてあと半世紀はこないぞ。まあ結果的にはミズホにも、ちつとも好かれなかったわけだけど」

「そんな絶望的なこと言っくなよ……」

おれが言ったことを想像したのか、ヤマトは露骨に肩を落とした。若干目に涙を溜めているようにも見える。

「だいたいなあ、ヤマト——じゃなかった、三歳児の作った泥団子が『どうしても彼女がほしい』っつーからわざわざ紹介してやったんじゃないか。ヤマト——じゃなかった、三歳児の作った泥団子は、おれの厚意を無駄にする気か？」

「訂正するのが逆だよ！ しかも長いわ！ おまえ失礼にもほどがあるだろ！」

「まあ、がんばって仲良くなれよ。せつかくおれが紹介してやったのに、おまえはそれを無駄にする気か？ せつかくミズホの攻撃的な部分を全部おまえに押し付けてやろうと思っただのに、おまえは友達甲斐のないヤツだな。鬼。悪魔。この犬畜生が」

「話聞いてたら、おまえのほうがよくばど友達甲斐ねえよ！」

「いや、っーかおまえなんか友達じゃねえし」

「三秒前と言ってること違うんですけど！」

ツッコミの連続で、はあはあと息を切らしているヤマト。

驚くほど話が前に進んでいない。あ。おれのせいかな。

「で、結局昨日はどういう話になったわけ。最終的にさ」

おれは無理やり話を先に進めることにした。

「いや……なんか、ミズホちゃんに毒吐かれるままだったから、特になにも進展はないけど」

「ふーん。じゃあ、ちゃんと話したほうがいいんじゃないの」

なにが「じゃあ」なのかは自分でもよく分からなかった。

ただ、そうしたほうがおれとしては面白いと思っただけの話だった。

「そう、かな」

「だって、お互いに消化不良のままなんだろう？　これから仲良くやってくにしろ、そうじゃないにしろ、ちゃんと話したほうがいいんじゃないの？」

おれは先ほどの言葉を繰り返した。

我ながらよく分からないことを言っているな、と思った。

「そっか……そうだな。うん。分かった」

おれのよく分からない説得に、ヤマトは納得したようだった。

まあ……ヤマトが分かったって言うてるならそれでいいか。

よく分からないけど面白い展開になってきたな、と思っておれはほくそえんだ。

「じゃあちよつとミズホちゃんと話してくるけどさ。いいか！　ぜーったいに余計なことすんじゃないやねえぞ！」

執拗に念を押して、ミスホの前に近寄っていくヤマト。これはどういう意味なのか。おれには考えるまでもないことだった。

お笑い芸人に「押すな」って言うってことは？ お笑い芸人に「そこにバナナの皮があるから転ぶなよ」って忠告するってことは？ そう。これはいわゆるお約束というヤツなのです。私はそれに全力で答える義務があるのです。正直、半笑いです。

自分の中でそう結論付けたおれは、出来うる限りの力でヤマトを前に押し出した。

分かりやすく言うなら、タツクルした。

「な、おま……！」

結果、ヤマトはミスホに思い切りぶつかる。衝撃でその場に尻餅を付きそうになるミスホを、すかさず抱きとめるヤマト。ほぼ条件反射だったんだろうが、いくら「性格ブス」と称していても、相手は女の子なのだという意識が働いたんだろう。

「あーあ。ヤマトってば手が早い」

「おまえのせいだろ！」

ミスホが体勢を整えたことを確認すると、ヤマトは慌てた様子で体を離そうとした。だが、あせった拍子に、ヤマトはミスホを突き飛ばしてしまった。

「いつて……なに調子こいてんだ、おまえ」

ミスホは親の仇を睨みつけるような目をしていた。これはアレだ。キレてる。

刺すような視線を向けられたヤマトの肌は、遠めで見ても分かるほど鳥肌でいっぱいになっていた。

「や、らぶらぶだねえ。なんつーかアレだねえ。アツイねえ。先発投手大炎上って感じだねえ」

「それはアツイってことを示す表現じゃねえ！」

おれが言うのもなんだけど、今のおまえにとって、ツッコミどころはそこじゃないだろうに。

「まあいいや。おれ、そろそろ晩飯の時間だから帰るわ。ママに怒られちゃう」

「おまえ母親いないだろうが！ つーか助けるよ！ ちよ、なんで拳握ってんのミズホちゃん！ うわ、待って、痛いっ、ごめんって！ ちよ、こら、コウタ！ おま、助け……いやああああああああっ……！」

そんな絶叫を聞きながら、おれはその場を後にした。

鬼のような形相をしたミズホ、ぼろ雑巾のようにされるヤマトの姿を、それぞれ想像しながら。

その日の出来事で一番おれの印象に残ったこと——それは、我が家の今晚の献立が麻婆豆腐だったことだ。

第十一話 長男とその友人達のその後（後書き）

コウタと大学の友人たちのお話は、とりあえず終了です。
次回からはまた遊佐家に焦点をあてたお話になります。

第十二話 長男と次男と罰ゲーム（前書き）

今回、内容が薄い割にちょっと長いです。

前後編に分けようかと思ったんですが、ちょうどいい節目がなかったもので。

申し訳ないんですが、ご了承ください。

第十二話 長男と次男と罰ゲーム

「でも、ダイキにも困ったもんだよね」

リビングでツバキと話をしていると、唐突にそんな話題が出た。

「は？ なにが？」

「勉強のことよ。この間の国語の宿題でも学校で叱られたって話でしょ。テストの成績もよくない——っていうか正直最悪だし、毎日遊び歩いてばかり。なんとかならないかなあ」

「なんだ、そんなことか。大丈夫、大丈夫。あいつなら心配しなくても、このまま順調にいけば社会の階段から転げ落ちて落伍者まっしぐらだよ」

「だから、それを心配してるんだけどね」

「まあ、アイツくらいの歳のガキなら、外で遊ぶことも大事だよ」

「それは否定しないけどね。でも、だからって勉強は必要ないってことにはならないでしょ」

「勉強に関してはおれもあんまりしてなかったから、大きなことは言えないけどな」

「なんかいい手はない？ ダイキに勉強する気を起こさせるような」

あのバカに勉強する気を起こさせる、ねえ。

「もし、ダイキがちゃんと一日二時間くらい勉強机に向かうように仕向けてくれたら、なんかご褒美あげるからさ」

その言葉を聞いたおれは寝転がっていたソファアからがばつと状態を起こした。

「ご褒美って、キャツシユ!？」

「キャツシユ……って、ええ? ご褒美って現金が前提なの?」

「ええ。金が多すぎて困ることはないの。ええ」

もみ手をしながら営業スマイルを作ってみせるおね。ツバキはこれでもかというくらい大きなため息をつく。

「……わかったよ。野口でいい?」

「諭吉で」

「諭吉は無理だよ! んー……じゃあ樋口で! これ以上は無理だよ!」

「引き受けましょう」

おねはすがすがしい表情で天井を見上げた。今、二階の自分の部屋でくつろいでいるだろうダイキを見据えるかのように。

あ、ちなみに、分かると思うけど、野口だの樋口だのは、紙幣に書かれてる人物の名前ね。五千円で手を打ちました、ぼく。

*

「ということで、おまえの指導者をやってくれてツバキから頼まれたから」

「えー、コウが? 指導者とか似合わないー」

「それに伴いまして、まず手始めに用意いたしました、こちらでございます!」

そう言っておねは直径三十センチほどの立方体の箱を取り出す。上面に丸くくりぬかれ、大人の手が入る程度の穴が空いている黒い不透明の箱だ。

「なに、それ？」

当然、ダイキは不思議顔だ。おれはダイキの質問には答えずに話を進めた。

「おまえ、この間の国語の宿題で、おれとカスミに協力させたくせに、結果は散々だったらしいじゃん」

「いや、それはコウのせいでもあるんじゃない」

「うつせーボケ。人のせいにすんな」

「や、だってコウがちゃんと教えてくれなかったから」

「ざけんなバカ。おまえに人並みの教養があればそもそも他人の協力をあおぐ必要なんかなかったんだろ。すべてはおまえの頭がポンコツだったせいだろ！ お前がバカだったからバカなりのバカげた結果が出たんだ！ それなのに自分がバカであることの責任までおれに取らせるのか！ おれか！ おれが悪人でおまえが正しいのか！ 悔い改めるバカ！」

「ご、ごめん」

マシンガンのように放たれるおれの糾弾に、気おされたかのようにダイキは尻込みしながら謝罪した。ちなみに、今の言葉はよく考えずに適当な理屈を並べ立てたものだったので、おれ自身にもいまいち意味は分からない。

「よろしい。それを踏まえたうえで、これだ」おれは先ほど取り出した不透明の箱に、ぽんと手を置く。「名付けて、罰ゲームボックス、な」

「罰ゲームボックス？」

「例の宿題の結果が散々だったおまえには、家族から罰ゲームを募

った。この中には罰ゲームが記入された用紙が入れられている。おれが適当に引いて出た内容の罰ゲームをお前がやるってわけ」

「罰ゲーム？ はーん、読めたぞ」ダイキは目を細めて、笑みを浮かべた。「罰ゲームの中に＜一日何時間勉強する＞とかって内容の罰ゲームがあるんだろ？ そうやっておれに勉強させるつもりなんだろ。そんな手でおれが勉強なんかするかよ」

勝手に予想を立てて勝手に悦に入っているダイキをよそ目に、おれは罰ゲームボックスから用紙を取り出した。

「じゃあ最初の罰ゲームだけど、こんなん出ました。

＜あらかじめ削いでおいたおまえの片耳にパン粉をまぶしたものを、油でカラツと揚げて美味しくいただく＞だって」

「ハードル高すぎだろ！ ＜あらかじめ削いでおいた＞ってなんだよ！」

「だから、言葉通りの意味だって。お前の片耳をあらかじめ削いでおくんだよ」

「そんなモン美味しくいただけるか！」

「大丈夫だよ。美味しくいただくのはおれだから」

「あんたホントに美味しくいただきそうだからイヤっすね！」

おれが必死で考えた罰ゲームを、ダイキは無下に却下した。思春期の心は難しい。

「じゃあこんな罰ゲームはどうよ？ これはおれの案なんだけど＜スクランブル交差点の中心でオナナの人を指差しながら『おまえ、それドブでふやけたスーパーボールじゃなくて単なるドブスのお姉さんだからー！』と叫ぶ＞」

「すいませんホント勘弁してもらっていいですか」

「だめ？ ああそう。じゃあ次ね。＜満員電車のシルバーシートに横たわる＞っていうのは？」

「いや、今までのに比べたらまともだけど、中一の子供にそれやらせようとする教育どうよ」

「バツカ。中一だから許されるんじゃない。おれやツバキがやったら可及的すみやかに車掌さん呼ばれるわ」

「どっちにしろあんたら保護者は白い目で見られますけどね！」

弟のツツコミが日に日に大人びてきている気がするのだけど、気のせいだろうか。

「あつ、この罰ゲームまだ続きあつたわ。＜そのせいでお年寄りがシートに座れなくて困っていたら『あ、気が利かなくてすみません』と声をかけて、お年寄りが一抹の期待を抱いたところで――隠しておいたモツプの柄でガツーン！＞」

「ガツーンじゃねえよ！ ていうかなんで殴るんだよ！ お年寄りには大事にしるよ！ そもそもモツプなんて隠して電車乗れないし！」

「別に＜アイスピックで耳の穴から脳漿をえぐりだす＞でもいいらしいよ」

「凶器の問題じゃねえよ！ ていうか表現がグロいよ！」

「ちなみにこのお便りは、遊佐家の次女である遊佐カスミさんからいただきましたー。カスミさんありがとー」

「あんのアマ！」

「よし。あんのアマ！ って言ってたこと、カスミにはちゃんと伝えておいてやるからな」

「あ、すみません。ほんと自分調子こいてたつす。マジで勘弁してください」

電光石火の速さで土下座するダイキ。こういうところはまだ大人びてこなくていいと思うんだけど。まあいいか。

とにかく、この罰ゲームもダイキにはお気に召さないらしい。次の罰ゲームを引くでしょう。

ボックスから、次の罰ゲーム記入用紙を引く。氏名欄にはツバキの名前が記入されていた。で、肝心の内容はというと。

<同じ失敗を繰り返さないように、一日二時間の勉強を義務づける>

「……」

罰ゲームじゃなくてしつけど、コレ。それなら初めから罰ゲームなんていう案には乗らないで、自分で真つ当な教育するべきだろ。

「え。ど、どんな罰ゲームが出たの？」

「すいません、間違えました」

「なんで戻すんだよ！ちゃんと読めよ」

「はいはい。次のお便りでーす」

「な、なんて書いてあったんだよう！ずるいぞ！」

何食わぬ顔で用紙をボックスに戻すおれに、不満顔のダイキ。もちろん無視。

「続いての罰ゲームは、あ、またおれのだ。<内臓を担保にして闇金から百万円借りて、おれにくれればいいじゃん！>」

「なんだよその個人的な要望のみの罰ゲーム！そもそも中一に金貸してくれる闇金なんて多分ないから！」

「大丈夫！それに関してはすでにリサーチ済みだ！」

「リサーチ済みなのか！？っていうか、なんですすでにその罰ゲームやらせる気まんまんなんだよ！」

「だめ？」

「だめだよ！」

「あつそう。じゃあ次の罰ゲームね」

ダイキはなんだか疲れたようにうなだれている。よし。無視。

「次の罰ゲームはー、お、カスミのだな。＜マッチのモノマネをする＞」

「あ、それならできそう」

「マジで？　＜火を点ける方のマッチだけど＞って書いてるよ」

「そっちのマッチかよ！」

「やー、さすがにカスミは頭いいなあ。＜ダイちゃんの頭に可燃剤、酸化剤などの薬品を練り込んだ薬品をたっぷり塗りつけて、発火剤、摩擦剤などを練り合わせた薬品を塗り込んだ紙やすりの上で、ものすごい勢いのヘッドスライディングをすれば可能、かも？＞だって」

「可能、かも？　じゃねえよ！　死ぬわ！」

「なにおまえ、反抗期？」

「自己防衛だよ！」

難しい言葉知ってんなあ、こいつ。最近のこいつって、おれより大人なんじゃないか。

「じゃあ次の罰ゲームいつてみよう」

「あんた、明らかにちゃんと罰ゲーム決める気ないよね！」

「あ、これツバキのだ。じゃ、これは読まずに戻して、と」

「なんでツバキちゃんのは読まないで戻すんだよ！」

「えーと、お、これはまたおれの罰ゲームな」

「無視かよ！」

「<今から一週間の間、言葉の語尾にかならず『いや、エロい意味じゃないよ？』とつける>」

「なんのフオーだよ！ 逆に誤解されるだろそれ！ いや、エロい意味じゃないよ？」

早速乗ってきたダイキ。やっとうるい罰ゲームが出てきたものだから、なんとかそれで乗り切ろうとしているのだろう。

「言つとくけど、今おまえ滑ってるよ？」

「あんたが言わせたんだろ！」

「まあまあ。この罰ゲームには続きがあるんだ。<今から一週間の間、言葉の語尾にかならず『いや、エロい意味じゃないよ？』とつける。それだけならまだしも、危ないクスリをやってトリップする>」

「関連性ないだろ！ それだけならまだしもってなんだよ！ なんであんたら兄妹は、おれを犯罪者にしたがるわけ？」

「<さらに、正気に戻った時、なぜか右手には血で染まった大きなサバイバルナイフが握られており、左手には大量の毛髪、さらに全身には鮮やかな返り血が……>」

「怖っ！ 怖いよ、なにしたのおれ！？ ていうか、自分の意思じゃないだろ、そんな罰ゲーム！」

「おまえなあ、さつきからワガママが過ぎるぞ。こんなんじゃ罰ゲームなんか決まらないだろ」

「実現可能な罰ゲームがないからだろ！」

「実現は可能だろうが！ ただ、お前が逮捕されたりちよっと血な

まぐさい目に遭ったりするだけで！」

「だから、それが問題だつつつてんだよ！」

「じゃあもう手っ取り早い罰ゲームとして、糖分を過剰摂取して若年性糖尿病になれよ！ おまえ！」

「手っ取り早くねえよ！ しかもなんだその後を引く罰ゲーム！」

「じゃあ二ツパーで鎖骨とか切ればいいじゃん！」

「やだよ！ 想像しただけで痛いわ！」

「ワガママ言うな！ いいからやれよ！」

「ワガママじゃないだろ！ そんな罰ゲームやるくらいならきちんと勉強するわ！」

「じゃあ、毎日二時間勉強できんのか！？ おまえ！」

「やってやるっつーんだよ！」

「ああそう！ 絶対だな！ できなかったら分かってんだろうな！
？ 今度こそ絶対罰ゲームやらせるかなん！」

「やってやるよ！ 勉強すりゃ済む話なんだろ！」

「そつか。じゃ、がんばって」

「え？」

なんか、解決した。

我が愚弟は、頭に血が上るとバカになっってくれるので助かる。

「だ、だましたな、コウ！」

「だますとは人聞きの悪い。勉強するって宣言したのはおまえだよ？」

「あ、悪質な誘導尋問に引っかけたんだ！ こんなのは無効だ！
「いいか。バカのおまえにいいことを教えておいてやる。契約つてのは口頭でしたものも有効なんだよ。つ、ま、り。おまえはしっかり勉強しなきゃいけないし、もしそれを破ったら罰ゲームを受けな

きやいけない」

「ま、マジかよ」

「別に無視してもいいよ？　ただ、おれは法で守られてるし？　もしおまえが約束を破ったり、勉強してるふりしておれを欺こうとしやがったら、おれは罰ゲームをやる楽しみが増えるだけだから」

「お、鬼……悪魔……」

「分かってねえな。法律っていう分かりやすい正義はおれにあんだよ。この国の法律じゃ契約を履行しようとしているおれが正義で、反故にしようとしているおまえが悪だ。おれは、やると言ったらやる。法に触れないギリギリのところで、おまえが一番苦しむ罰ゲームを考えて、実行する」

「……」

ダイキは顔を蒼白にしている。その顔には——おそらく冷や汗だろうか——多量の汗をかいている。

あ、なんかすっごい楽しい。

「ちなみに、それから逃れる方法があるんだけど」

「え？　なにになに？」

途端に目を輝かせてみせるダイキ。ちょっと持ち上げただけでこれだ。こいつはきつと、セールスマンにだまされてあやしいツボとが買っちゃうタイプだろう。

「聞きたい？」

「き、聞きたい聞きたい！」

「千円」

「は？」

「だ、か、ら。千円でおまえを今の窮地から救う、ありがたーい作

戦を教えてやるっつーんだよ」

「か、金とんの!？」

「あたりまえだボケ。世の中そんな甘くねえんだよ」

「わ、分かったよ」

よっぽど勉強したくないのだろう。ダイキはしぶしぶ財布から千円札を取り出した。

「毎度あり。じゃ、教えてやる。けど、その前に」

「こ、今度はなんだよ」

「この作戦はなー、おれが協力してやらないと、実行できないんだよなー」

「え？」

「あー、あと千円あつたらおまえの味方してやるんだけどなー。たった千円じゃ作戦を教えてやるのが限界だなー。しかもたった千円じゃ、口が滑って作戦の内容をツバキに言っちゃうかもなー」

「き、汚ねえ! 最初からそのつもりだったんだろ!」

「んー、聞こえない。今使った千円を有効な買い物にするのか、ドブに捨てるのかはお前次第だ。つーか、千円でおれを味方につけるんだよ? こんな安い買い物ないよ?」

「ちくしょー、ろくな死に方しないぞ、おまえ」

言いながら千円札をおれに叩きつけるダイキ。

「何とでも言え。毎度あり」

「で、なによ。作戦って」

「簡単なことだよ。おれは『テストで高得点を取れ』とは言つてない。ここがポイントだ。ちなみに、おれはツバキにもそんなことを頼まれてはいない。ツバキがおれに頼んだ内容は『ダイキがちゃんと一日二時間くらい勉強机に向かうように仕向けてくれ』だからな

つまり、一日二時間、勉強机に向かった結果が悪くても、罰ゲームにはならない」

「えっと……どういうこと？」

おれはダイキの耳元で小さくささやいた。

「とりあえず一日二時間、机に向かっとけ。マンガでも読んでりゃいいから。そんで、誰かが入ってきたらそのマンガは、あらかじめ広げておいた参考書の下に隠しとけ。それだけでおまえは罰ゲームを免れるし？ おれの面目躍如にもなるし？ おまえが勉強していいと思ひ込んでゐるツバキは嬉しいだろうし？ あら不思議。なんと、みんなハッピーなんだねーこれ」

「おおー。すげー！」

別に何一つすくはないのだが、ダイキはまるで自分を救うメシアを見るような感嘆の眼差しを向けてきた。

「だろ？ だからお前は労せず罰ゲームを逃れられるんだよ」

「おお！ 助かったあ！ 一日二時間も勉強するなんてごめんだからな！」

すべて計画通りだ。正直、おれが提案した案は、作戦と呼べるほどのものじゃない。そんなズサンな計画が、ここまでうまくいくとは。全部、ダイキがバカなおかげだ。これで労せず七千円をゲットしてしまった。

おれは緩みそうになる頬を引き締め、ダイキを眺めた。おれの作戦を疑う様子もいぶかしむ様子もない。完璧だ。

おれは自分の計画が手はずどおりに進んだことに満足し、ニヤけた表情をダイキに悟られないように手に入れたばかりの千円札で口元を隠した。

しかし、このときおれは、部屋の入り口で一連の会話を全て聞いていた人物がいたのに、まったく気付いていなかった……。

第十二話 長男と次男と罰ゲーム（後書き）

安易。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1959d/>

みちくさホームパーティー

2010年10月13日13時27分発行